

発話機能論の原理

——命令・服従を例として——

山 岡 政 紀

はじめに

筆者は現在、発話機能論の理論構築に取り組んでいる。その概略については、既に山岡（2000）で明らかにしている。つまり、コミュニケーションにおけることばの対人的機能として、命題内容条件によって規定される文レベルの機能である文機能と、語用論的条件を考慮した発話レベルの機能である発話機能とを立て分けることを提唱したうえで、議論の手順として、文機能に関する研究を集中して行った。それは、従来、モダリティとして議論されていた概念群が実は発話機能の概念群であり、両者を橋渡しする中間的概念として文機能という概念を提唱したものであった。したがって、最終目的はあくまでも発話機能の体系全体を明らかにすることである。本稿では、改めてその関係を明確にするために、文機能が発話機能を構成する条件群であるという、一種の包含関係を明示したい。

また本稿では、発話機能の実態により即した理論体系を構築するため、いくつかの新しい考え方を導入する。具体的には、会話に参加する二者が対等であり、かつ、両者が語用論的条件を共有することを重視する立場から、「連」という概念を新たに導入する。これらの理論体系の妥当性を確認するための象徴的な事例として、《命令》・《服従》という一連の発話機能を取り上げる。

本研究は、J・サールの発話行為論¹⁾とM・A・K・ハリデーの発話機能論²⁾の両理論からそれぞれの欠点を除き、それぞれの長所を援用して理論構築している。重要な概念を導入する際に多少はそのことに言及するが、理論的な背景、両理論との詳細な関係性については、Yamaoka（投稿中）など、別稿にて詳述する。

1. 発話機能と語用論的条件

発話機能 (speech function) とは、話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したものを指す用語である³⁾。

例えば、上司が部下に、(イ)「当分地方で休養しないか」と言ったとする。表現そのものは強制的ではないが、表現する以前の間人間関係において、上司は部下の行動を規制する権限を持っているため、部下はこの発話を通常、地方への転勤命令であると受け止める。すなわち、この発話は《命令》の機能を持つとすることができる。《命令》の機能は、「聴者に対する行為遂行の強要」のように定義することができる。このように発話機能の範疇を表示する際、わかりやすさのために、《 》で表示する。発話機能は、言語表現だけでは決まらず、この例に見られるような会話参与者 (participants in conversations) 間の人間関係や、他にも会話参与者の利害、能力、予備知識、社会通念などさまざまな語用論的諸要素が統合されて一つの機能が発動する。ある特定の機能の側から見れば、こうした語用論的要素群は、その機能が発動するための条件となるので、これを語用論的条件 (pragmatic conditions) と呼ぶ⁴⁾。《命令》の語用論的条件は、次の三項目である。

《命令》の語用論的条件

- ① 話者が聴者の行動を規制する権限を有していること
- ② 意図されている行為が聴者の意志によって実行可能であること
- ③ 通常の事態の進行において聴者がその行為を行うことは自明でない

2. 語用論的条件の共有

語用論的要素としての会話参与者は、話者 (speaker) か聴者 (hearer) ⁵⁾ の二者によって成り立つ。このことは実際の会話参与者の人数に拠らない⁶⁾。

発話機能を規定する語用論的条件の重要な特徴は、それは話者だけから見たものではなく、聴者もまたそれを共有していることが前提となるということである。

《命令》について言えば、上述の三つの条件は、話者にも聴者にもそのことが認識されていなければならない。ただし、その判断を行うのは、各発話の話者である。そこで、もし、話者から見て条件①が聴者に共有されていないと判断されれば、話者は《命令》の前に、条件充足のための予備発話を行おうとするだろう。例えば、(ロ)「今日から私が君の上司だ。私の指示に従ってもらいたい」というような前置きをしてから、具体的な《命令》の発話を行うであろう。

また、話者から見てそれが聴者と共有されていると判断して、《命令》を行ったつもりでいたが、実際には聴者がそのような認識をしていなかったとしたら、《命令》は適切には発動していないことになる。その場合の発話は何の機能も果たさず宙に浮くことになるが、聴者がそのことに気づくはずである。すると聴者は、次の応答の話者として、(ハ)「あなた、いったい何の資格があつて私たちに指示しているんですか」と聞き返すなどして、その溝を埋めようとするだろう。いずれにせよ、二者の双方が語用論的条件を互いに共有することを意図した言語行動を行うはずである。

3. 要求と付与

二者の参与者によるあらゆる会話の原型は、《要求》(demand)と《付与》(giving)である⁷⁾。例えば、「雨降ってる?」「いや、降ってないよ」のような情報志向的な発話における《質問》(question)とその回答としての《叙述》(statement)の関係においても、一方の参与者が情報を要求し、他方の参与者がそれに応じて、情報を付与するという、一体の関係がみられる。本稿で例として用いている《命令》は、それとは全く異なる行為志向的な発話だが、相手に行為を要求し、相手はそれに従う意思を付与するわけである。「休憩してもいいですか」「ええ、どうぞ休んでください」もまた、許可の要求と許可の付与である。これらの一連のやり取りから、共通して《要求》と《付与》の関係が読み取れる。本稿では、この《要求》と《付与》はあらゆる二者の会話の原型であり、基礎的な発話機能と認める。

改めて整理すると、《命令》は相手に行為を求める一種の《要求》であり、それに対し、《付与》に当たるのは、《命令》に対する《服従》である⁸⁾。《命令》の聴者は、発話を必要としない行為を話者から要求されている場合、無言でその要求された行為を遂行することは可能ではあるが、通常の会話では何らかの形で《服従》の意思表示をしないと、話者に対して失礼に当たり、むしろ《命令》への反発を表すことにもなる。言語による要求に対しては、言語による《服従》が付与されるのが通常である。(イ)に対する《服従》の例としては、(ニ)「承知しました」とか、(ホ)「そのように致します」等などがあり得る。

4. 会話の単位としての「連」

ここで確認したいことは、《要求》と《付与》とはその双方が互いを補完するもので、常に表裏一体の関係にある、ということである。この両者を組み合わせ

た一まとまりを、会話の一つの単位と考えるべきである。これを「連」(stream)と名づけることにする。

第1節で提示した語用論的条件は、一種の《要求》である《命令》の側から見て、「話者、聴者」という用語を用いたが、一つの連においては、二者の双方が話者であり、聴者である。《命令》の話者は《服従》の聴者であり、《命令》の聴者は《服従》の話者である。この双方は対等であり、かつ、対称的な関係である。そして、第2節で示した通り、語用論的条件はその双方が共有するものであるから、一方のみを指して話者、聴者と呼ぶのは不適切と考える。したがって、下記の通り、改めるべきと考える。

《命令》・《服従》の語用論的条件

- ① 参与者Aが参与者Bの行動を規制する権限を有していること
- ② 意図されている行為が参与者Bの意志によって実行可能であること
- ③ 通常の事態の進行に於て参与者Bがその行為を行うことは自明でない

ここでは、「参与者A = 《命令》の話者・《服従》の聴者」「参与者B = 《命令》の聴者・《服従》の話者」という意味になる。

参与者Bが《服従》ではなく、《拒否》を行う可能性も当然あり得るが、《命令》を行う参与者Aが期待しているのは《服従》であり、語用論的条件の内容から言っても《服従》が発話されるのが自然な連であると言える。《拒否》がどのような際に、どのようにして行われるのかについては、一種の例外規則のように別立てで用意しておく必要がある。実際のところ、《拒否》は、語用論的条件が実は共有されていなかったことを参与者Bが主張するケースが多い。つまり、①について、参与者Bが参与者Aの権限を実際には認めていなかったような場合、また②について、命令された行為が参与者Bにとって実際には遂行不可能であったような場合が考えられる。いずれも上述の語用論的条件に沿った通常の応答とは見なされないのである。

また、《付与》のあとに、それに対する《承認》が続く場合も多い。《付与》を評価する「よし」「それでいいんだ」、感謝の意を表す「ありがとう」などがあり得る。それならば、《要求》・《付与》・《承認》の三発話をもって一連とみなすべきであろうか。しかし、《付与》は多くの場合、《承認》を要求しているのであり、《承認》はそれに応えたものとも言える。したがって、《要求》に応じてなされた《付与》が同時に《承認要求》を兼ね、それに対する《承認付与》が《承認》の発話に当たる。したがって、《服従》と《承認》の関係もまた、《要求》と《付与》という原型をあてはめて解釈することができる。このように見る

と、結局、連の原型はあくまでも《要求》と《付与》の二者だけで十分である。

〔表1〕は発話機能とその基礎範疇である《要求》と《付与》の関係を表示したものである。この表は、《命令》・《服従》・《承認》にそれぞれ、《要求》と《付与》という原型からみた場合の別名があることを示している。

〔表1〕 会話を連の観点から見た場合の各発話の機能

| | | | |
|------|-------------|--------|---------|
| | 当分地方で休養しないか | 承知しました | それでいいんだ |
| 発話機能 | 《命令》 | 《服従》 | 《承認》 |
| 第一連 | 《服従要求》 | 《服従付与》 | |
| 第二連 | | 《承認要求》 | 《承認付与》 |

4. 発話機能の条件としての文機能

発話機能と文機能との間には相関関係があり、特定の発話機能を発動し得る文機能には制限がある。言い換えれば、発話がある発話機能を発動するためには、その発話から語用論的条件を捨象した文が一定の文機能を持っていなければならないのである。

例えば、(イ)「当分地方で休養しないか」は、語用論的条件とは無関係に、もともと文として、相手に何らかの行為を誘いかける一定の機能を持っている。それは、「①述語が意志動詞の否定疑問形であること、②述語の時制が非過去であること、③主語が第2人称⁹⁾、または、第1人称+第2人称¹⁰⁾ 動作主格であること」の3種の命題内容条件 (propositional content conditions) ¹¹⁾ が充たされた場合に認められる機能であり、これを〈誘導〉と呼ぶ。もし、この文の述語が意志動詞の否定疑問形であっても、時制が過去形であったり、主語が第3人称であったりすれば、〈誘導〉の文機能は発動しない。そして、〈誘導〉の文機能が発動していなければ、どのように語用論的状况が設定されても《命令》の発話機能は発動しない。

《命令》の発話機能の場合、それを発動し得る文機能は、〈命令〉、〈遂行〉、〈誘導〉、〈願望〉、〈意志要求〉の五種に限定される。また、《服従》の発話機能を発動し得る文機能は、〈肯定応答〉、〈受容〉、〈意志〉、〈遂行〉、〈情意〉の五種に限定される。これら個々の文機能とその命題内容条件については次節以降で詳細に考察する。

《命令》が文機能をどのように制限しているかについては、すべての文機能に

わたってその可否を論じる余裕がないが、語用論的条件が満たされさえすれば、何でも《命令》となるわけではないことは、ここで示しておきたい。上述のうち、〈誘導〉と〈意志要求〉とは疑問文の形式を取っているが、同じ疑問文でも、次のような例では《命令》とならない。

(1) 君も地方で休養するのか？〈説明要求〉

(2) 君も地方で休養したいか？〈願望要求〉

(1) は聴者の予定を尋ねるような発話となり、その行為が話者の権限の影響下にはないように受け取れる。(2) は聴者の希望を尋ねるもので、上司が聴者の希望や意志を尊重しながら意思決定を進めようとしているように受け取れる。しかし、これらのいずれも直ちにこの発話が《命令》であるとは受け取れない¹²⁾。

また、他に次のような〈行為評価〉の場合も、《命令》とはならない（下線は交替箇所）。

(3) 君も地方で休養してもいい／したらいい／するといい。〈行為評価〉

このように、《命令》の発話機能を発動し得る文機能は限られているのである。つまり、発話機能には文機能条件とも言うべき条件があることになる。これは理論的に言えば、本来、発話機能の命題内容条件と言うべきものを、それがあまりにも複雑であるために、中間段階の階段の踊り場のような概念として、命題内容条件群を一旦、便宜的に文機能として束ねているのである。それらの条件群の異なりごとに、異なる文機能の名称を与え、〈 〉で表示する。そして、この文機能を、発話機能の直接の条件であるかのように、理論的に仮構しているわけである。

この文機能も、語用論的諸要素が考慮される以前の部分的な意味ではあるが、対人的機能をもっている。それに語用論的条件の充足が加わって、最終的な機能である発話機能が発動するのである。以上から、《命令》・《服従》の発話機能が発動するための条件は、次のように示すことができる。

《命令》・《服従》の語用論的条件

- ① 参与者Aが参与者Bの行動を規制する権限を有していること
- ② 意図されている行為が参与者Bの意志によって実行可能であること
- ③ 通常の事態の進行に於て参与者Bがその行為を行うことは自明でない

《命令》の文機能条件 〈命令〉、〈遂行〉、〈誘導〉、〈願望〉、〈意志要求〉

《服従》の文機能条件 〈肯定応答〉、〈受容〉、〈意志〉、〈遂行〉、〈情意〉

この文機能こそ、機能と構造との橋渡しをする中間段階と言える。日本語文法において、最も極端な構造の側で、こうした対人機能的意味を特定の形態素の意

味として担っているのが、いわゆるモダリティ形式である。このこともこの際、改めて確認しておきたい。

一般言語学的にモダリティと認められているのは認識様態的モダリティ（推量、伝聞、可能性など）だが、日本語文法のモダリティ研究史においては、多くの研究がこれに加えて、発話の対人機能的意味（命令、意志、勧誘など）をモダリティに含む考えを示した。両者は区別されて、「対事的モダリティと対人的モダリティ」（寺村秀夫（1985））、「言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティ」（仁田義雄（1989））等と立て分けられてはいたが、その所在を文末形式のみに帰着させようとするところに無理があり、文末形式に特定できない対人機能的意味に関する議論が全く無視されてきた。その象徴的なものが、「（私は）今すぐそちらに向かいます」のような文末形式が無標の〈意志〉¹³⁾であった。これなどは「①述語が意志動詞であること、②述語の時制が非過去であること、③述語のモダリティ形式が無標であること、④主語が第1人称動作主格であること」という命題内容条件群の束としての〈意志〉とみなす以外に、その機能的意味を特定の形式に帰着させることはできなかったのである。山岡（2000）では、この文機能について詳述したが、モダリティ論の限界を乗り越える有効な議論であったと考えている。しかしながら、実際のコミュニケーションにおいて発動している最終的な機能は発話機能である。その意味では、文機能が発話機能の要素として抽出される理論的中間概念に過ぎないことは、本稿において明示したことになる。

5. 《命令》となる各文機能と命題内容条件

ここでは、《命令》を発動し得る各文機能の命題内容条件について述べることにする。最初に文字通りの〈命令〉である¹⁴⁾。

〈命令〉の命題内容条件¹⁵⁾

- ① 述語が意志動詞の命令形¹⁶⁾であること
- ② 主語が第2人称動作主格であること

ここで確認しておきたい重要なことは、文機能としての〈命令〉と、発話機能としての《命令》は、同じ名称を用いているが全く次元の異なる概念であること、そして、語用論的条件の方が命題内容条件よりも強い決定力を有することである。ここに記した〈命令〉の命題内容条件を満たした文が、実際の発話において、《命令》以外の、《依頼》、《助言》、《許可》などをはじめ、さまざまな発話機能を発動することがあり得る。例えば、《許可要求》・《許可》の語用論的条件である「①参与者Bが参与者Aの行動を規制する権限を有していること、②意図

されている行為を参与者Aが欲していること」が充たされている状況において、(A)「休憩してもいいですか」(B)「ええ、どうぞ休んでください」というような発話がなされれば、(B)の文機能は〈命令〉であっても、その発話機能は《許可》となる。このように最終的な発話機能の決定に直接関与する優先順位は、命題内容条件よりも語用論的条件の方が高い。逆に、《命令》の語用論的条件が充たされていれば、〈命令〉だけでなく、上に挙げた他の四種の文機能もまた《命令》の発話機能を発動するのである。

次に、〈遂行〉は、(ハ)「君に地方支店への転勤を命じる」のように、遂行動詞を述語とする遂行文のことである。遂行動詞とは、その動詞を発話すること自体が、その動詞が表す行為を遂行することになるような特殊な動詞群のことで、「約束する」「命名する」「賭ける」などがよく知られている。ここでは、遂行動詞のうち、「命令する」「命じる」「命ずる」などが該当する。命令の意味を幅広く取れば、「指名する」「任命する」なども含まれよう。

〈遂行〉の命題内容条件

- ① 述語が遂行動詞であること
- ② 述語の時制が非過去であること
- ③ 述語のモダリティ形式、アスペクト形式が無標であること
- ④ 主語が第1人称動作主格であること

これは〈遂行〉一般の命題内容条件だが、《命令》となり得る〈遂行〉に限定するためには、付加条件「①B 述語の遂行動詞は命令を表すものに限る」を加える必要がある。

第三に、〈誘導〉は、前節までに(イ)として例示してきたものであるが、改めて示す。これは意志動詞の否定疑問形を用いて相手に何らかの動作を誘いかけるもので、主に《勧誘》に用いられる文機能だが、《命令》としても用いられ得る。《勧誘》の場合は主語が第1人称を含まなければならないが、《命令》の場合は、含んでも含まなくてもどちらでもよい。

〈誘導〉の命題内容条件

- ① 述語が意志動詞の否定疑問形であること
- ② 述語の時制が非過去であること
- ③ 主語が第2人称動作主格、または、第1人称+第2人称動作主格であること

第四に、〈願望〉は、(ト)「私は君を地方で休ませたいんだ」のように、意志動詞のタイ形を述語とする文で、さまざまな発話機能を発動し得る汎用性の高い文

機能である。

〈願望〉の命題内容条件

- ① 述語が意志動詞のタイ形であること
- ② 述語の時制が非過去であること
- ③ 述語のモダリティ形式が無標であること
- ④ 主語が第1人称経験者格であること

《命令》に用いられる場合には付加条件⑤「非主語に第2人称対象格の項があること」を加える必要がある。また、述語に授受補助動詞を用いて (f)「君に転勤してもらいたいんだ」と表現しても文機能は同じ〈願望〉である。ただし、授受補助動詞を用いると《依頼》となる可能性も発生する（詳細は別稿に譲る）ので、それが《命令》なのか《依頼》なのかが語用論的条件によって明確であるような発話状況でなければ使いづらい。(t) ならば《依頼》にはなり得ない。

第五に、〈意志要求〉は〈意志（表出）〉を疑問文にしたもので、命題内容条件は述語の疑問形を指定し、主語の人称を第2人称に指定する点で、〈意志〉とは連をなし得る対称的な関係となる。用例としては、(r)「君、少し地方で休養するかい？」のような文である。

〈意志要求〉の命題内容条件

- ① 述語が意志動詞の疑問形であること
- ② 述語の時制が非過去であること
- ③ 主語が第2人称動作主格であること

これも (f) と同様、述語に授受補助動詞を用いて (x)「君、地方で休養してくれるかい？」と表現しても文機能は同じ〈意志要求〉である。ただし、その場合、やはり《依頼》となる可能性も発生するので、語用論的条件が明確な発話状況でなければ使いづらい。もっとも実際には《命令》なのだが、強圧的な印象を和らげるために授受補助動詞を用いることも多い。したがって、(x) が《依頼》ではなく《命令》だとすれば、(r) よりはやわらかな印象となる¹⁷⁾。

理論的に厳密に言うならば、《命令》という発話機能は、命題内容条件と語用論的条件という二種の条件が充足することを要求するわけだが、発話機能と命題内容条件との相関関係はあまりにも多様で複雑である。上記の五種の命題内容条件群を見ても、発話機能との関係を一元化、一般化できる項目は一つもなく、各条件群のそれぞれ①に規定された日本語固有の述語形式が、《命令》の発話機能を発動するために、命題全体を整えたものが②以降の各項目と見るのが妥当である。したがって、わかりやすさのために、その述語形式ごとの命題内容条件群の

束を、文機能という中間概念として立てているのだとも言える。

発話機能を規定する語用論的条件群は、個別言語の形式的特徴に左右されないため、個別言語を超えた普遍性を相当程度に有すると考えられる。もちろん、まったく普遍的であるとも言えないが、個別言語による違いが認められれば、むしろそれは比較言語文化論の興味深いテーマとなるであろう。

いっぽう、命題内容条件は明らかに個別言語ごとに規定していかなければならず、したがって、発話機能と文機能の相関関係もまた、個別言語ごとに論じるべきものであろう。

6. 《服従》となる各文機能と命題内容条件

《服従》にもいろいろな表現があり得る。第一に、単純に応答詞「はい」をもって答えるものである。これは文の形をなしていないが、実質的に相手が提示した命題内容を全肯定する効力を持つ。この文機能を〈肯定応答〉とする。その命題内容条件は応答詞「はい」「ええ」「うん」の使用のみである。

第二に、相手の《要求》の内容を受容するもので、「わかりました」「承知しました」「かしこまりました」「諒解しました」などの表現がこれに当たる。この文機能を〈受容〉とする。

〈受容〉の命題内容条件

- ① 述語が受容動詞¹⁸⁾であること
- ② 述語の時制が過去であること
- ③ 主語が第1人称経験者格であること

第三に、相手から要求された行為を、未来に行う意志を表出するものである。(イ)に対してならば、(ル)「私、地方に参らせていただきます」などのように、相手が提示した命題内容を繰り返すか、(ヲ)「そうします」「そのように致します」のように、指示詞を用いて相手が提示した命題内容を省略するか、どちらかである。これらの文機能を〈意志〉とする。〈意志〉の命題内容条件は、前節で既に述べた通りであり、省略する。

第四に、〈遂行〉による《服従》もあり得る。(ワ)「あなたの指示に従います」のように、遂行動詞を用いて直接的に服従の意思を示すのである。〈遂行〉の命題内容条件は、前節に示したものと同じだが、《服従》となり得る〈遂行〉の付加条件が、「①B 述語の遂行動詞は服従を表すものに限る」となる。

第五に、(カ)「ありがとうございます」のように、相手の《命令》に対する感謝の表現は、間接的に《服従》を意味する。その文機能は〈感謝〉である。(ヨ)

「うれしいです」「期待しておりました」などのように、肯定的な感情を表現する〈情意〉もこの種の《服従》となり得る。〈感謝〉は〈情意〉の一種である。

〈情意〉の命題内容条件

- ① 述語が感情形容詞であること
- ② 述語の時制が非過去であること
- ③ 述語のモダリティ形式が無標であること
- ④ 主語が第1人称経験者格であること

ただし、《服従》となり得る〈情意〉は、述語となる感情形容詞が肯定的な感情を表すものに限定されるため、付加条件「①B 述語の感情形容詞は肯定的感情を表すものに限る」を明示することが必要である。

これら五系列はそれぞれ単独でも用い得るが、多くの場合、(タ)「はい、わかりました。部長のご指示に従い、地方に参らせていただきます。ありがとうございます」のように、複合的に用いられる。(タ)の各文機能を表示すると、(タ')「はい〈肯定応答〉、わかりました〈受容〉。部長のご指示に従い〈遂行〉、地方に参らせていただきます〈意志〉。ありがとうございます〈感謝〉」となる。全体としてはどこを切っても《服従》であり、どの部分単独でも《服従》の機能は持ち得る。

7. 《命令》・《服従》の実例

以下に、この五種の文機能を用いた《命令》・《服従》の実例を、《命令》を発動し得る文機能5種について、それぞれ一連ずつ挙げる。各発話が語用論的条件①を満たしていることを示すために、会話参加者の関係性を職種等で示す。なお、語用論的条件②③については、ここに挙げた用例においては、すべて満たされていることが自明であり、特に表示を必要としない¹⁹⁾。なお、用例中の下線部は《命令》の発話、波下線部はそれに対する《服従》の発話で、いずれも本稿の筆者による。

- (1) 参与者：(A) ホテルのマネージャー持田、(B) ホテルの従業員

発話：「サブマネージャーの一平も出張していることだし、きみたちが責任を持って計画してくれ。いいね」「ハイッ」と、元気のいい声があがる。(HOTEL)

機能：〈命令〉→《命令》，〈肯定応答〉→《服従》

- (2) 参与者：(A) 渡辺第二号艦建造主任、(B) 造船所作業員

発話：午後二時〇分、渡辺第二号艦建造主任は、小さな台の上にのると、

「私は、本日ここに本艦の進水を命じる。進水準備作業主任は、工作部長
芹川正直。進水時間は、明朝八時五十五分とする」と、顔を紅潮させて
言った。緊迫した静けさがひろがり、作業員たちは渡辺の顔を身じろぎ
もせずに見つめつづけていた。（戦艦）

機能：〈遂行〉→《命令》，《服従》の発話なし（状況のみ表示）

- (3) 参与者：(A) 隊長，(B) 水島上等兵

発話：あの山に、日本兵がたてこもっていて、どうしても降伏しない。
それで、三日前からイギリス軍がこれを攻撃して、いまだ戦闘がつづ
いている。このままでいけば全滅のほかはない、ということだ。（中略）
どうだ水島、行って何とか説得してみないか。（中略）水島はしばらく考
えていましたが、やがてきっぱりといいました。「行ってまいります」
（ビルマ）

機能：〈誘導〉→《命令》，〈意志〉→《服従》

- (4) 参与者：(A) トレヴィザン提督，(B) 青年医師ニコロ

発話：「（前略）コンスタンティノーブルに艦隊を派遣することになった。
指揮官に任命されたのは、このわたしだ。きみにも、ぜひとも医師とし
て乗船してほしい。航海をともにした医師は多いが、若いきみは、最
もこの種の任務に向いている」（中略）「コンスタンティノーブルにはま
だ行ったことはありませんし、喜んで同行させていただきます」（コンス）

機能：〈願望〉→《命令》，〈意志〉→《服従》

- (5) 参与者：(A) 桑田伸子社長，(B) 社員・竹野純子

発話：「新聞や週刊誌から何本か電話がかかって来たわ。全部断ったけ
ど。——みんなにも、マスコミの取材には応じないように伝えてく
れる？」「はい、社長」（女社長）

機能：〈行為要求〉→《命令》，〈肯定応答〉→《服従》

なお、(2) には《服従》の発話がない。これは、参与者の位置が離れていてし
かも一対多の関係であるという特殊性に拠るものである。この例では、《服従》
がなくても反発などが表されているようには感じられない。ここでは、《命令》
を行った建造主任を作業員がじっと見つめる姿をもって、服従の意思が表現され
ているものとして、その箇所に波下線を引いた。

また、(4) の～テホシイは授受補助動詞テモラウのタイ形である～テモライタイ
と同義であることから、〈願望〉として扱う。したがって、(4) についても (5)
についても、第5節で述べたように、授受補助動詞が使用された際に見られる、

強圧的印象の緩和が見てとれる。《依頼》とも連続しているが、それぞれの用例の人間関係からみてこれらは《依頼》と見るべきではないであろう。

いずれにせよ、このように実例を検討することによって、6節までに考察してきた理論的枠組みが、発話機能の実態を正確に記述できるものであることが見てとれるであろう。

8. 行為拘束系の他の連について

Searle (1979) では、発話行為 (speech act) ²⁰⁾ を五つの範疇に分けている。Assertives, Directives, Commissives, Declarations, Expressives の五つである²¹⁾。この範疇化はそのまま発話機能論にも適用できると考える。

ところで、サールにはハリデーの基礎的発話機能に相当する発想がないため、一連のなかで表裏一体であるはずの《命令》と《服従》とを、それぞれ Directives と Commissives という別範疇に分けて考えている。しかし、筆者は共通の語用論的条件を共有し、一つの連をなす会話は、個々の発話というよりもトータルとしての連が一つの目的を持っている、つまり、連を構成する複数の発話の一つの目的を共有すると考える。したがって、Directives と Commissives を統合する一つの範疇を立てる必要があると考える。ここでは、それを仮に行為拘束 (Deontics) としておく。

行為拘束に属する発話機能の連には、多様な種類がある。[表2] はそのうちの代表的な7種の連について、基礎的発話機能に照合させて提示したものである。

[表2] 行為拘束的会話の諸連 (the streams of Deontics conversation)

| 《要求》 (demand) | 《付与》 (giving) |
|---|--|
| 話者A, 聴者B | 話者B, 聴者A |
| 《注意要求》(attention-demand) | 《注意》(attention-giving = Attention) |
| 《許可要求》(permission-demand) | 《許可》(permission-giving = Permission) |
| 《助言要求》(advise-demand) | 《助言》(advise-giving = Advise) |
| 《約束要求》(promise-demand) | 《約束》(promise-giving = Promise) |
| 《依頼》(cooperation-demand = Request) | 《協力》(cooperation-giving = Cooperation) |
| 《命令》(obedience-demand = Command) | 《服従》(obedience-giving = Obedience) |
| 《勧誘》(co-commitment-demand = Invitation) | 《応諾》(co-commitment-giving) |

この7種の連ごとに語用論的条件の充足が要求される。《命令》・《服従》と、《許可要求》・《許可》の語用論的条件については、既に述べたが、他の連については、詳細を山岡（未公刊）に譲ることにする。そして、各発話機能がどのような文機能と対応しているかについてもそちらで詳細に論じることにはしたい。本稿では、発話機能論の発想と骨格を示すことができたと考える。

注

- 1) Austin (1962) によって提唱された発話行為論 (Speech Act Theory) は、ことばを発すること自体が行為の遂行となるような遂行文 (performative sentence), 遂行動詞 (performative verb) の分析を行い、それを継承した Searle (1979) は、発話内行為 (illocutionary act) の記述をより一般化し、遂行文だけでなくあらゆる発話を持つ行為としての性質一般を、詳細な適切性条件によって記述する方途を確立した。
- 2) ハリデーの理論は、統語上の諸要素を、その機能的特性によって選択される選択肢の体系とみなすもので、自身によって選択体系機能文法 (Systemic Functional Grammar) と称されている (Halliday (1994) 1.6)。発話機能 (speech function) はその体系を構成する一つの要素。対人機能的意味に関わり、発話行為論と関心の対象が重なることから本研究で取り上げている。発話機能論 (Speech Function Theory) は発話行為論の呼称にならって本稿の筆者が名づけたもので、ハリデー自身の呼称ではない。
- 3) 日本語学における発話機能は、国研 (1960) における「表現意図」が日本語教育における機能シラバスの観点からの教材文の特徴を記述するために用いられ、その後、国研 (1987) がハリデーの「発話機能」を会話分析に応用して用いたものが先の「表現意図」に取って代わって多用されている。したがって、日本語学史的に見た「発話機能」は国研の影響力と、日本語教育における需要がキーワードとなる。詳細は別稿にて論じる。
- 4) Searle (1969) 等における適切性条件 (felicity conditions) の一つである準備条件 (preparatory conditions) に相当する。
- 5) 聴者に当たる原語は、サールは hearer を用いるが、ハリデーは listener を用いている。本稿ではその違いに特に言及しない。
- 6) 3名以上の人物が会話に参加し、かつ、2対1のような2グループに分かれるのではない、対等な3名A, B, Cの会話であっても、Aは、Bに話しかけるか、Cに話しかけるか、BとCの両方に話しかけるか、このいずれしかなく、相手がどちらであれ、また、一人であれ、二人であれ、一単位の聴者に対して話しかける。したがって、理論的には会話参加者は、話者と聴者の二者しかいない。
- 7) Halliday (1985) では、発話機能の最も基礎的なタイプとして、giving と demanding の二種があるとしている (p.68)。なお、山口他訳 (2001) ではそれぞれ「与える」・「要求する」と、動詞で訳されている。

- 8) ここでの「命令、服従」という語はあくまでも用語であることを確認しておきたい。実際の用例を見ていくと、上位者の権限と言ってもその程度はさまざまだが、本研究ではその程度の差を捨象して質的にその語用論的条件に沿う場合の発話機能をすべて「命令、服従」と呼んでいる。したがって、用例の中では、一般語としての「命令、服従」の印象に合うのは、軍隊の上下関係ぐらいしかないが、そうした語の印象を度外視して質的な意味でこの用語を取り扱っていることを了解いただきたい。
- 9) 発話機能を規定する語用論的要素としての話者、聴者は参与者A、Bと言い換えたが、文機能を規定する命題内容の一部である主語の人称は、あくまでも文の文法的要素としての人称であるため、参与者A、Bのように呼び換えることはしない。
- 10) 厳密には、第1人称の包括的複数 (inclusive plural) と言うべきもの。山岡 (2000) p.24参照。
- 11) Searle (1969) 等における適切性条件 (felicity conditions) の一つ。サールは命題内容条件、準備条件、誠実性条件の三つの適切性条件を対等に扱っているが、本研究では命題内容条件は文機能、語用論的条件 (準備条件) は発話機能を規定するものとしてレベルを分けている。なお、誠実性条件は不要と考える。これらの考えについては山岡 (2000) で既に示している。
- 12) ただし、そのいずれも、聴者に対して極端に強い権限をもった話者が発すれば、迂言的な《命令》と取れなくもないが、状況によって程度差があるため、定式化の範囲外と考えることにする。
- 13) 厳密には〈意志表出〉。本研究をなるべく日本語教育などに応用できる実用性の高いものとするために、極力用語を簡潔にしたい。そこで、他と混同する恐れが少ない範疇は、進んで略称の方を用いることにする。あとに出てくる〈感情〉、〈情意〉、〈願望〉なども厳密にはそれぞれ「表出」の語がつく。
- 14) 文機能の多くは〈意志〉のように、条件②以降が充たされなくても非文にはならず、別の文機能が発生するため、文機能は条件群として規定する以外にない。ところが〈命令〉の場合は、語尾を命令形に固定すると (命題内容条件①)、条件②③を充たさない文は非文となるため、動詞命令形を述語とする文をイコール命令文とみなして差し支えがなかった。そのため、命令の意味は命令形という形式のみに帰着するかのよう誤解されてきた。「命令形」という名称もここから来ている。これは文機能のなかでは特殊な事例と考えるべきである。
- 15) 命題内容条件の表示を山岡 (2000) から少し変えたが、表示の仕方を変えただけで内容は変えていない。例えば、「非過去時制辞-ruを接続すること」としたものを本稿では「述語の時制が非過去であること」としているが、内容的には同義である。実用的な応用を念頭に置くと後者の方がわかりやすく有用であると判断した。また、「主語が第1人称動作主格であること」は、厳密には「主語の人称が第1人称であること」「主語の意味格が動作主であること」という二つの条件の混合だが、これも実用的な観点では、一つにした方がわかりやすい。
- 16) 命令形には、～テクレ、～テクダサイ、～ナサイ、～タマエ等、各種補助動詞の命令形を含む。

- 17) (ト) の場合も, (チ) よりは強圧的なはずだが, 別の意味で強圧的印象を和らげる発話となっている。内容的に相手の利益を考慮しているかのように装っているからである。
- 18) 一般的ではないが, このように〈受容〉文の述語となる動詞を便宜的に受容動詞として範疇化した。「わかる, 承知する, かしこまる, 諒解する, 了解する, 承服する」などが挙げられる。
- 19) 《命令》の諸条件が, この語用論的条件②だけが充たされず, 他がすべて充たされているような発話は, 《命令》の形をしてはいるが, その機能を持たない, いわば「命令崩れ」となる。例えば, 卑俗な言い方だが, 「おととい, 来やがれ」や「豆腐の角で頭を打って死ね」などは, 「命令崩れ」の《罵倒》と言えるだろう。
- 20) Searle (1979) 第2章において間接発話行為についての議論がなされて以降, サールは発話行為 (speech act) という語を発話内行為 (illocutionary act) と同義で用いるようになった。
- 21) 山岡 (2000) ではこれらに対し, 演述, 指動, 話者拘束, 宣言, 表出という訳語を与えたが, その後も更に研究者によってさまざまな訳語が提示され, 相当な混乱状態にあるのが実状である。ここでは混乱を避けて原語のみを示し, 何らかの方法で訳語統一のための私見を世に問いたいと考えている。

用例出典

出典の略称を () 内に示す。出典を明示しないものは作例。提示順。

(HOTEL) 「ホテル」1994年9月22日／TBS系放送／横田与志・酒井あきよし脚本／『週刊テレビ番組』(東京ポスト刊) 掲載のテレビドラマ・シナリオより。

(戦艦) 吉村昭「戦艦武蔵」, (ビルマ) 竹山道雄「ビルマの豎琴」, (コンス) 塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」, (女社長) 赤川次郎「女社長に乾杯」, 以上, CD-ROM版『新潮文庫の100冊』を利用した。

参考文献

- Austin, J.L. (1962) *How to Do Things with Words*. Harvard University Press. (邦訳: 坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』大修館書店)
- Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. Edward Arnold. (邦訳: 山口登・寛壽雄訳 (2001) 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』くろしお出版)
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) —対話資料による研究—』秀英出版
- 国立国語研究所 (1987) 『談話行動の諸相』三省堂
- Palmer, F.R. (1986) *Mood and Modality*. Cambridge University Press.
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析』くろしお出版.
- Searle, J.R. (1969) *Speech acts*. Cambridge University Press. (邦訳: 坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為』勁草書房)

Searle, J.R. (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge University Press.

Searle, J.R. (1992) *The Rediscovery of the Mind*. The MIT Press.

Yamaoka, Masaki (投稿中) The Comparison between Speech Act and Speech Function

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』 くろしお出版

山岡政紀 (未公刊) 『発話機能論』 くろしお出版

(やまおか・まさき, 本学教授)